

堀 恵子 **Keiko Hori**

---

## 学術場面での口頭発表における課題問いかけ表現「でしょうか疑問文」の使用実態:コーパス調査と授業実践に基づいて

Izvorni znanstveni rad  
Original scientific paper  
UDK 378.147.091.32:811.521'243  
<https://doi.org/10.32728/tab.18.2021.2>

### 要旨

学術場面での口頭発表では、課題を「でしょうか疑問文」の形で聞き手に問いかけることが効果的であるが、これまでの指導書等では明示的に示されてこなかった。

本稿では、日本語教育において「でしょうか疑問文」がどのように指導されてきたかを概観した後、『日本語話し言葉コーパス』Corpus of Spontaneous Japaneseから「でしょうか疑問文」の使用実態を明らかにした。さらに、上級学習者クラスにおいて、調べたことを発表する授業に「質問づくり」を取り入れ、作成した質問を書き直して「でしょうか疑問文」を作り、問いかけにできることを指導に取り入れた。その結果、授業内の口頭発表において「でしょうか疑問文」を使って問いかける学習者が見られた。

したがって、「でしょうか疑問文」による「問いかけ」の明示的な指導が口頭発表技術の向上に貢献する可能性が示唆された。

キーワード: 「でしょうか疑問文」、問いかけ、『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)、学会講演、コミュニケーション、質問づくり

## 1. はじめに

言語教育の目的がコミュニケーションであることは言うまでもない。さらに学術場面での口頭発表においても、発表者と聞き手とのコミュニケーションが鍵であるとアンホルト(2008: 24)は述べている。そしてそのために、発表、すなわち科学的な〈物語story〉の筋書きを示すために、まず研究課題を〈問いquestion〉として表現し、その問いに対する答えを徐々に明らかにしていくという形で構成するのがよいと主張する(アンホルト 2008: 24)。

この研究課題すなわち〈問い〉は、英語では話し手の知らない情報を聞き手に聞くのと同じタイプの疑問文で示される<sup>1</sup>が、日本語では文末にデシヨウカをつけた疑問文(以下、「でしょうか疑問文」)で示される。しかし、「でしょうか疑問文」については、文法の面からダロウカ/デシヨウカに関する考察はあるが、学術場面での口頭発表というレジスターにおける「でしょうか疑問文」の使用状況、使用頻度などを調査した研究はなく、日本語を第二言語とする学習者の指導の指針となるものはない。

また、学習者向けに口頭発表の技術を示した指導書や聴解教材では、「でしょうか疑問文」が例文中に存在するが、聞き手への「問いかけ」として使用することに関する明示的な説明はない。

一方、堀ほか(2018)では、批判的思考力を高めることを目的に学習者に質問づくりをさせる授業活動(後述)を行っているが、筆者はそのなかで作成した質問を「でしょうか疑問文」に書き換えて、口頭発表での課題提示に使えることを指導している。

そこで、本稿では、日本語教育において「でしょうか疑問文」がどのように指導されてきたかを概観した後、『日本語話し言葉コーパス』Corpus of Spontaneous Japanese(CSJ) (以下、CSJ)から「でしょうか疑問文」の使用実態を明らかにし、学習者への指導例として、堀ほか(2018)に基づいて質問づくりに取り入れた指導の結果、学習者の使用が見られたかを調査に基づいて述べ、最後に今後の日本語教育への提言を行う。

1 Anholt (2006:42) の例は、“How do neurons from the lateral geniculate nucleus project to the visual cortex?”など、通常の疑問文と同じである。

## 2. 「でしょうか疑問文」 1 対人配慮

「でしょうか疑問文」は、「推量の助動詞ダロウ＋疑問の終助詞カ」という形である。ダロウは、旧日本語能力試験出題基準(以下、『出題基準』)では推量・概言として3級項目であった。

(1)明日は晴れるだろう。<sup>2</sup>(『出題基準』3級)

日本国内外で広く使用されている初級教科書『みんなの日本語』(以下、『みんな』)では、後半の第32課が初出である

(2)あしたは雪が降るでしょう。(『みんな』第32課)

その後、第44課の会話文に丁寧体で出されているが、これは推量の用法ではなく、丁寧さを示す表現である。

(3)美容師:前の長さはこれでよろしいでしょうか。

イー:そうですね。もう少し短くしてください。(『みんな』第44課)

しかしながら、『みんな』文法解説書にもこの箇所について特段の説明はない。また、この用法は『出題基準』では扱われていない。

清水(2013)は中上級向けの会話教材において、目上の人や親しくない人に対する許可や依頼の場面で、より間接的な形にする方法の1つとして、「です」を断定を避ける表現「でしょう」に変えると説明している。(例4, 5は清水(2013)より)

(4)お休みさせていただきたいのですが、よろしいでしょうか。

(5)今日の午後提出していただけないでしょうか。

このように、推量・概言のダロウが断定を避けることから、接客のような丁寧な場面や、対人関係に配慮した場面で使用する表現として指導されている。

しかしながら、「でしょうか疑問文」は、対人関係に配慮する表現だけではない。次章からは、疑念を表す表現、主張の表現、さらにほぼ取り上げられ

2 下線は筆者。以下、同じ。

ることのない話し手が情報を持つ際の表現について述べる。その後、口頭発表における課題提示との関連について述べる。

### 3. 「でしょうか疑問文」2 疑念の表現

ダロウカ／ノダロウカは、グループジャマシイ(1998)によると、ともに事態が起こる可能性について疑念を抱いたり、心配したりする気持ちを表すが、特に後者については、ノダがついていることから「話し手が文脈から得た情報や状況に基づいて推量しているときに使われる」としている。ノダはこのように状況や先行文脈との関係づけをするため、原因を説明したり、意味を述べたりする場合に使用される(野田 1997)。

中上級以上のレポート論文作成のための指導書において二通ほか(2009)は、問題提起／疑問の提示の表現として、「[「だろ／であろうか」]<sup>3</sup>を提示している。これがデス／マス体の話し言葉、書き言葉では、「でしょうか疑問文」で示される。

(6)一生恋愛は不可能でしょうか。(BCCWJ<sup>4</sup> Yahoo!知恵袋)

(7)その後何ら音さたなしなんです。これはどうして出さないのでしょうか。(BCCWJ 国会議事録)

### 4. 「でしょうか疑問文」3 主張の表現

口頭表現技術の指導書である東海大学留学生教育センター(1995)は、意見表明のスピーチで使える意見表明の表現を挙げているが、その中で「明白に述べるのをさけた言い方」として、「でしょう」等を示している。加えて、「聞き手に問いかける形で述べる言い方」として、「～ではないでしょうか。」「～と言えるのではないのでしょうか。」を挙げている。これらはデショウカの前に否定表現ノデハナイが必ず接して、反語的に主張を示すものであり、問いかけとは言えない。したがって、本研究における「でしょうか疑問文」とは区別されるべきものである。

3 引用した書式は原文の表記に従う(以下、同じ)。

4 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese(BCCWJ)は、国立国語研究所が中心となって開発した日本語大規模均衡コーパスである。レジスターとして、Yahoo!知恵袋、国会議事録など11のジャンルがある。例文の表記は、BCCWJ『中納言』の表記に従った。話し言葉の書き起こしであり、言い直し、言い誤りなど不明瞭な表現を含むが、そのまま示した。

## 5. 「でしょうか疑問文」4 話し手が情報を持つ表現

瓜生(2003)は、「でしょうか疑問文」の用法を、①話し手に判断があるか否か、②聞き手の情報の有無、③問いかけ性の強弱、の3点の組み合わせから分類している。このうち、話し手に情報があり、聞き手に知識、情報があるか、ある場合正しいかを知るための質問は、クイズ的に質問する用法としている。また、注において、講演などで「問題を提示し聞き手の思考を促す用法もある」と記している。これが、本研究が焦点とする用法である。

話し手は話題に関する情報、すなわち答えを持っているが、敢えて問いかけの形で伝えることで、聞き手の注意を喚起し、ともに答えにたどり着く推論を共有しつつ聞き手の興味を引きつけることになる。アンホルト(2008: 24)が指摘する科学的な<物語story>の筋書きを構成することができると思われる。

一方、日本語教育での扱いを見ると、東海大学留学生教育センター(1995: 73)では、「テーマの紹介」の前置きのように挙げられているのみで、課題提示として明確に示されていない。

(8)「日本の終身雇用制はなくなるのでしょうか。今日は、新聞や雑誌を読んで知ったことをご紹介します。」

また聴解教材として、犬飼(2007)、東京外国語大学留学生日本語教育センター(2014)は、口頭発表の音声教材の中で「でしょうか疑問文」を用い、音声スクリプト等に示している。特に前者は「別冊 表現スクリプト」として、当該表現を機能別に列挙している(例9)。しかしながら「でしょうか疑問文」の使用に対する説明などはない。

### (9) <問題提起>

それでは、なぜ・・・のでしょうか。犬飼(2007 別冊)

以上、日本語教育における「でしょうか疑問文」の取り上げられ方を見てきたが、聞き手に対する問いかけとしての使用は、教材にはあっても、明示的に指導はなされていないことが明らかになった。

## 6. CSJにおける「でしょうか疑問文」の使用実態

それでは、学術場面において「でしょうか疑問文」は何を示すときに、どのような頻度で使用されているのだろうか。本章ではCSJを分析することで明らかにする。

CSJは現代日本語の自発音声を研究的付加情報とともに格納したデータベースで、語数は約750万語、時間は660時間の発話が含まれる(前川2015)。このうち独話には「学会講演」<sup>5</sup>「模擬講演」「その他の講演」の3つの講演タイプがあり、「学会講演」は理工学、人文、社会の3領域の学会における研究発表と特別講演、「模擬講演」は人材派遣会社からの派遣で「人生で一番嬉しかったこと」など決められたテーマによるスピーチ、「その他の講演」は一般聴衆向けの講演や専門学校における日本語教師養成機関での講演が含まれている(前川2015)。独話に収録されている講演タイプ別話者数、講演数、時間数を表1に示す。

表1 CSJの独話の講演タイプ別話者数、講演数、時間数

独話の講演のタイプ	話者数(異なり)	講演数	時間
学会講演	819	987	274.4
模擬講演	594	1,715	329.9
その他の講演	16	19	24.1
合計	1,429	2,721	628.4

CSJはweb上でも公開されており、オンライン検索システム『中納言』を用いて検索した。独話の3講演に限定して文字列「デショウカ」を検索した結果、ヒットした用例は1,560例であった。これらの例文を、文の機能、聞き手、話題によって分類し、「問いかけ(対聴衆・本題)」、「問いかけ(対聴衆・その他)」、「問いかけ(対その他の人)」、「主張」、「その他」の5種類に分けたものが表2である。

「問いかけ(対聴衆・本題)」とは、発表の本題に関わる事柄を聴衆に問いかけるものである(例10)。本研究が焦点を当てている課題の問いかけに使用される用法である。

5 学会講演は発表部分のみで、質疑応答部分は収録されていない。

(10) なぜR Lだけえーカラーレーションの生じ方が他に比べて弱いんでしょうか (学会講演 A01M0358<sup>6</sup>)

また、「その他の講演」においては日本語教師養成機関での教師と受講生のやりとりの中で、受講生の解答を引き出す問いかけとして多く使用されている。解答を引き出す問いかけは、この講演においては主たる目的と見なせるため、ここに分類した。

(11) ケーデターは単純語でしょうか#えー複合語でしょうか#派生語でしょうか#どうでしょう#じゃ単純語の人は手を挙げてみてください(その他の講演 M03F0002)

「問いかけ(対聴衆・その他)」とは、話し手が聴衆に問いかけているが、発表内容の本題に関わる事柄ではなく、例12のように、発表途中にスライドの見え方を確認するようなものや、例13の日本語教師養成機関の講座において、課題番号を確認する問いかけなどである。

(12) え自動化辞らるれおよびえー他動化辞あちょっと小さいですか#見え見えますでしょうか (学会講演 A03M0523)

(13) 一番初め何ですか#第何課でしょうかね#一二三四って左に書いてあんのが課なんです(その他の講演 M03F0016)

「問いかけ(対その他の人)」とは、聴衆ではなく、会場係などその他の人に対して問いかけるものである。例14では、話の途中で発表時間について会場係に問いかけている。

(14) 意欲としてはあんまり良くないと#もう時間いっぱいでしょうか#はい#そいじゃあの一これで打ち切りますが(学会講演 A01M0914)

「主張」とは、「でしょうか疑問文」<sup>3</sup>で示したように、「(の)ではないでしょうか」の形で話し手の主張を述べるもので、「でしょうか疑問文」ではない文である。

(15) こうした特徴を持つ移動パターンが出現してるのは特記すべきではないでしょうか(学会講演 A09F0600)

6 数字は講演IDを示す。本文の表記は『中納言』の出力に従った。CSJの転記規則は小磯ほか(2006)による。例文中の「#」は節単位区切りを示す。

「その他」とは、例16のように引用文中の表現、例17のように推量を示すものもあるが、多くは例18のように、自信のなさ、疑い、推理などを示す「どうか」(メイナード 2005:271)の丁寧体の「と言うんでしょうか」として使用されている。また例19のように「何て言うんでしょうか」の形で挿入句というよりフィラーとして使用される場合も見られる。

(16)もう一つ前の質問で昼間診察時間中に頼む時どうでしょうかと言って聞いておいて (学会講演 A03M0175)【引用文中】

(17)各大名が恐らく秀吉の大阪城あるいはえー伏見城でしょうか#どこかへお城へ提出したんだと思うんですけども (その他講演 M01M0007)【推量】

(18) 前回については非常に高い評価を受けたのはえー特定の方言らしいと言うんでしょうか#一番特色を残しているものが収録できたということでもあります (学会講演 A05M0729)【どうか】

(19)教員というのはかなりその何て言うんでしょうか経験則に従って動くところが多い多くありますので (学会講演 A04M0026)【フィラー】

表2は、CSJの講演タイプ別に5種類の用法の出現頻度と1講演あたりの頻度を示している。本研究の焦点である「でしょうか疑問文」が聞き手に対して話題の内容を問いかける場合は、太枠で示したところである。

講演タイプ	講演数	問いかけ (対聴衆・ 本題)	問いかけ (対聴衆・その 他)	問いかけ (対その他 の人)	主張 (())では ないでし ょうか)	その他 (推量, フィラー 等)	頻度
学会講演	987	71	40	5	119	119	出現頻度
		0.07	0.04	0.01	0.12	0.12	1講演あたり
模擬講演	1,715	175	37	2	186	519	出現頻度
		0.10	0.02	0.00	0.11	0.30	1講演あたり
その他の講演	19	136	34	1	9	107	出現頻度
		7.16	1.79	0.05	0.47	5.63	1講演あたり
合計	2,721	387	110	8	314	741	合計1,560

表2 CSJの講演タイプ別デショウカの出現頻度(上段)と1講演あたりの頻度(下段)



「その他講演」は19講演と、他と比較して講演数が極端に少ないことから、「問いかけ(対聴衆・本題)」の出現頻度に関して「学会講演」と「模擬講演」のみを対象に量的分析を行った。表2に示すとおり、「学会講演」と「模擬講演」の各総数が異なることから、1講演あたりの「でしょうか疑問文」の頻度を求めると、「学会講演」が0.07回であるのに対し、「模擬講演」が0.1回であった。そこで、「模擬講演」のほうが「学会講演」より有意に頻度が高いと言えるかを検定するため、「模擬講演」と「学会講演」の2つの母集団における出現比率に関して、母比率の差の検定を行った。その結果、「模擬講演」と「学会講演」の差は有意であった(片側検定： $p \leq .05$ )。したがって、「模擬講演」における「でしょうか疑問文」の使用は、「学会講演」における使用よりも頻度が高いことが統計的に示された。

次に「学会講演」「模擬講演」「その他講演」の各講演タイプについて、質的に特徴を考察する。

「模擬講演」の1講演あたりの頻度は「学会講演」より高いが、最多使用者は1講演で10回使用しており、個人による差が大きいと言える。例20はその一部であるが、要所要所で聞き手に問いかけながら話を進めていることが分かる。

(20)後は世界の水として外国の飲み水はどうなっているんでしょうか#一番目にアメリカ各州での飲料水はペットボトルのミネラルウォーターを使用してるんでしょうか#二番目にえ一場所えーと山脈のある地域はどうなんでしょうか#三番目に大都市や人口が多い都市ではの飲み物は飲み水はどうなってるんでしょうか (模擬講演 S11F0906)

「模擬講演」は独話であるが「発話スタイルは概して学会講演よりもくだけたもの」(前川 2015)であるため、話し手が聞き手とコミュニケーションを図りながら話を進めていこうと意図していることが「でしょうか疑問文」の使用に現れたと考えられる。

これに対し「学会講演」では1講演あたりの頻度は0.07回と最も少ない。表3は、発表の冒頭部分の構成とその中での「でしょうか疑問文」が使用されている例21を示したものである。

表3 学会講演の冒頭の構成例 (例21)

発表の構成	学会講演例(A01F0055)
発表タイトル	えーっと「発表題目」ということでえーす発表します#
自分の研究分野	えー私共は乳児が音楽をどのように聞いているかまた聴取に発達年齢が見られるかを検討しております
発表のテーマ	本研究では旋律の調つまり長調ですとか短調の変化のひきわけん聞き分けに着目して実験を通してえー知見を得ましたので報告したいと思います
研究の背景	え長調短調の違いはえ成人の場合は比較的容易にあの普段から聞き分けていられると言われております#また海外のえー研究では四五歳児幼児はえ両者の弁別が可能であるという報告もあります#
研究課題	ではいつ頃から可能なのでしょうか#あるいは人間の発達の初期のえ段階から見られるようなえー傾向なののでしょうか

冒頭から、発表タイトル→自分の研究分野の紹介→発表のテーマ→研究の背景と述べたあと、それを受けて研究課題を「でしょうか疑問文」の形で問いかけている。

また、例(22)は考察を述べる部分に用いられた「でしょうか疑問文」で、課題に対する考察を示す際に、まず問いの形で聞き手の注意を喚起し、それに対する答えを示すという形で自分の主張を行っている。

(22) 二ページの二段落目学習者論的という形容語を冠してもよいアプローチかどうか。#それは基本的に何らかの葛藤や緊張関係を宿したものであるそういった立場であると言えるのではないでしょうか。(学会講演 A08M0206)

このように、学会発表においては、発表の初めに研究課題を示すときや考察部分で一つ一つ明らかになったことを示すときに「でしょうか疑問文」が使用され、科学的な<物語story>の筋書き(アンホルト2008: 24)の推論の到着点を効果的に示す機能を果たしていると言える。

では、「でしょうか疑問文」を使用しない場合は、どのように研究課題を提示しているのだろうか。例23では研究の背景・問題意識のあと、「目的」という語を使って示している。

(23)本研究の主要なおてっ目的はこの点を解明することにあります (学会講演 A01F0090)

また、結果を受けて考察を述べる場合、例24のように「～と考えられます」などを用いている。

(24) えー三回目の朗読ではポーズが長くなるという傾向がありました#えこれはを格名詞句がえ関係節に含まれた為にえそれを強調する為がの後のポーズが長くなったと考えられます

このように研究の目的や考察を述べる場合、淡々と述べる発表が相対的に多く見られ、表2で示したように「でしょうか疑問文」を用いる頻度は1講演あたり0.07回に過ぎない。学会発表の発話スタイルは改まったもので、話し手は客観的な立場に立って、聞き手である研究者、大学院生等に自分の主張を訴えつつも、近寄りすぎないという態度であると言える。

最後に「その他の講演」では、前述の通り「問いかけ(対聴衆・本題)」をはじめすべての頻度が高い。例11は、講座の受講生から解答を引き出す直接的な問いかけであり、19名のうち4名の講師の使用が合わせて133回とほぼすべてを占めている。

(11) (再掲) ケーデターは単純語でしょうか#えー複合語でしょうか#派生語でしょうか#どうでしょう#じゃ単純語の人は手を挙げてみてください(その他の講演 M03F0002)

学校の授業のように教師—学生の間では「でしょうか」ではなく「ですか」を使用するところであるが、社会人の受講生もいる可能性のある日本語教師養成機関の講座では、より丁寧に話すことで、受講生と常に良好なコミュニケーションを図り、円滑に授業を進めていこうという態度の現れであると考えられる。

以上、3種類の講演の質的分析の結果から、話し手と聞き手の人間関係の差異が、話し手から聞き手に対して話に引き込もうと問いかける「でしょうか疑問文」の使用頻度に表れているのではないかと考えられる。

本章では、CSJにおける「でしょうか疑問文」の使用調査から以下の3点を明らかにした。第一に、文の機能、聞き手、話題によって、5種類に分類される。「でしょうか疑問文」には、①聴衆に本題について問いかける、②聴衆にその他の話題について問いかける、③その他の人に問いかける、の3種類の用法がある。問いかけ以外の用法としては、「(の)ではないでしょうか」の形で主張を表す用法、「と言うんでしょうか」で発話内容に関する自信のなさなどを表す用法、フィラーのように用いられるものなどが見られた。

第二に、聞き手に本題について問いかける「でしょうか疑問文」の使用頻度の割合は、「その他の講演」>「模擬講演」>「学会講演」の順に高い。

第三に、このような使用頻度の割合の順は、発話スタイルや話し手と聞き手の人間関係の違いを反映していると考えられる。聞き手に問いかけることで、話に興味を持たせたり、話に引き込み、友好的にコミュニケーションを図ろうとする場合は使用頻度が高くなり、反対に客観的な立場で距離を取ろうとする場合は使用頻度が低くなるからであると考えられる。

以上から得られる日本語教育への示唆として、①聞き手への問いかけ表現は「ですか」ではなく、「でしょうか疑問文」を使用すること、②独話であっても、聞き手に問いかけて話に引き込む表現を使用することが円滑なコミュニケーションを図る上で有効である、③使用においては、場面や発話の改まり度に応じて聞き手との適切な距離を保ちつつ、取り入れることが重要である、という3点を指導することが考えられるだろう。

## 7. 質問づくりの実践における「でしょうか疑問文」の指導

堀ほか(2018)、堀(2018)は、批判的思考力を高めることを目的として、授業に質問づくり(後述)を取り入れている。本稿では、一連の活動の中で口頭発表の準備段階において言語形式にも注目させ、質問づくりで作成された質問文を書き換えて、口頭発表の課題提示や問いかけの「でしょうか疑問文」として利用できることを指導した実践について述べる。

口頭発表において、わかりやすく説得力ある表現を使って伝えることは、上級学習者であっても容易ではなく、適切な指導が必要である。本研究の授業実践では、自分でテーマを決めて調べ、意見を述べる発表をさせているが、その準備の過程にグループの協働を取り入れ、質問づくりを行っている。さらにその質問を利用して、一方的な発表ではなく、聞き手とのコミュニケーションを図り、説得力のある口頭表現になるよう指導している。

前章では独話の種類によって聞き手との距離のとり方に相違があり、その相違は聞き手に問いかける「でしょうか疑問文」の使用頻度の違いに反映していることが明らかになった。本実践のクラス内の発表は学術的な場面での発表であり、発話スタイルや話し手と聞き手の人間関係は「学会講演」と「模擬講演」の中間程度と考えられる。発表の構成や表現は改まったスタイルでなされるが、一方的になりすぎず、聞き手に伝わるように話すことが必要である。

学習者のクラス内での発表は、用意した原稿を読み上げるだけで、聞き手とのコミュニケーションを欠く発表になりがちである。そこで、発表に問いかけを取り入れることを指導した。学習者には、問いかけによって聞き手の注意を引き、発表者の意図が伝えやすくなることを理解させ、できれば発表に取り入れることを目標にして、「質問づくり」で選んだ質問文(後述)から「でしょうか疑問文」への書き換えを指導した。また、日本語学習者の場合、発表に問いかけを取り入れても、「ですか」疑問文を使うため、形式面に関しても指導を行った。日本語の授業で「でしょうか疑問文」の使用を経験すれば、将来の発表場面において表現の選択肢の1つにできるであろう。

## 8. 授業の概要1 コースの概要, 対象者

本実践は2017年秋学期に行われた。コースは、文系学部2年次留学生対象のクラスで、学習者のレベルは概ね上級である。学習者は1年次の入学時にプレースメントテストを受けているが、進級時には受けていない。1年次に必須の日本語授業の単位を取得している。コースの受講生は登録者32名で、そのうち本稿で取り上げる発表を行った者は28名であった。学習者の母語は、中国語25名、タイ語、ベトナム語、韓国語が各1名であった。大学入学以前の滞日歴、学習歴については不明である。

学習の目標は、①日本語の言語文化の特徴をコロケーションや比喩、ことわざなどを通して考えること、②日本語の言語文化に対する自分の考えを口頭・文章で表明することができるようになること、③そのために必要な総合的な日本語能力を習得すること、④大学生活に必要なコンピュータリテラシーを習得することの4点である。

1学期に3つの主な活動を行ったが、本実践はその1つとして、「日本語の広告のおもしろさを紹介する」というテーマの口頭発表をさせるものである。また、学期末には発表レジュメを基にしたレポートと、発表に関する振り返りを課す。

## 9. 授業の概要2 授業の進め方

全15回の授業のうち、初回到活動の予告をして広告に注意を向けるよう指示した後、第7回から第10回にかけて発表活動を行った(表4)。第2回から第6回まで比喩について読解で学び、第7回からは日本語の広告のおもしろさについて、言語表現のおもしろさ(比喩表現についての考察を含む)と社会的・文化的背景との2点から分析して紹介するよう指導する。グループ活動には質問づくり(後述)も取り入れた。

表4 15回の授業の流れ

回	授業活動	学習者の日本語の活動
1	オリエンテーション 「広告, 町で見つけた表現」発表予告	日本語学習の目標を話し合う
2-6	比喩について, (メタファー, メトニミー, 概念メタファー), 比喩まとめ	読解と要約, 正しい引用の方法
7	発表準備1	質問づくり, グループ内で発表のテーマ説明
8	発表準備2	質問訂正, グループで質問を選ぶ, 発表の表現練習
9	発表準備3	レジュメ作成, 発表リハーサル
10	発表	発表, 質疑応答
11-14	江戸カルタ講義, カルタの意味調べ, カルタ作成, カルタ会	江戸カルタの言葉と比喩について調べる, カルタ作成発表
15	レポート作成準備	レポートの構成, 下書き

## 10. 質問づくりとは

質問づくりとは, ロススタインとサンタナ(2015)に基づき7段階を踏んで質問を作らせるもので, 学習者に「発散思考」「収束思考」「メタ認知思考」の促進を目指すものである。質問づくりはグループで行うことから, 協働学習を促し, また, 大学教育に必要とされる課題発見-課題解決の能力の向上にも役立つことが期待される。質問づくりの7つの段階を下記に示す(図1)。

1. 質問の焦点の提示: 質問を作るきっかけを教師が与える。
2. ルールの提示: 質問を作る際の4つのルールの難しさをグループで話し合わせ, メタ認知思考を高める。4つのルールとは, a.最大限に質問を出す, b.話し合い・評価・解答の禁止, c.書記は発言通りに書き出す, d.疑問文でないものは疑問の形にする, である。
3. 質問づくり: ルールに従い, できるだけ多くの質問を出す。発散思考を促す活動である。
4. 質問の改善: 閉じた質問と開いた質問について理解させ, 数個を相互に書き換えさせる。メタ認知思考と収束思考を促す。

5. 質問に優先順位を付ける：質問を分析、比較、評価し、最もよい3問を選び出す。収束思考を促す。

6. 質問を使った教室活動：学習目標に合致した方法で質問を使用する。収束思考を促す。

7. 振り返り：学んだこと、考えたことを振り返る。メタ認知思考と収束思考を促す。

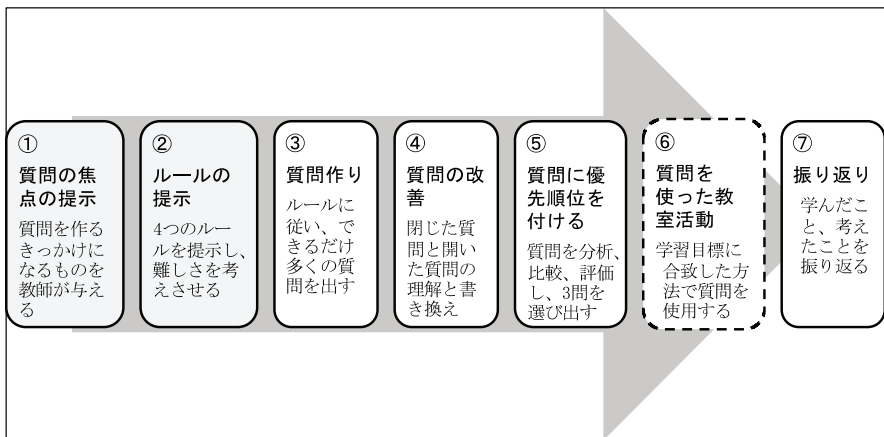


図1 ロススタインとサンタナ(2015)による質問作りの7つの段階(堀(2018)より)

質問づくりは第7回に導入し、質問の焦点を『「広告・町で見つけた言葉」の発表で聞きたいことは何か』とした。その結果、クラス全体で38の質問が作成された(例25-例29)。また、第8回には質問の文法的な誤りなどを訂正させた(例27-例29)。

(25) この広告語のどこが面白いと思いますか。

(26) どんな表現で言葉のおもしろさを伝えることができるか。

(27) なんで面白いと思うのですか。→なぜ面白いと思うのか。(訂正後)

(28) どうしてこの広告を選んだ?→どうしてこの広告を選んだのか。(訂正後)

(29) この広告語を見た前とみた後に気持ちは変わりましたか。→この「広告のことば」を見る前とみた後で、気持ちは変わったか。(訂正後)

## 11. 「でしょうか疑問文」の導入と指導

その後、質問づくりで選んだ3つの質問の答えを考えながら発表の準備をするよう指示した。

また、発表の表現に関して、質問を書き換えて「課題の提示」や「聞き手への問いかけ」に使う指導を行った。質問を引用節として書き換えると「課題の提示」となり、デショウカを付けることで「でしょうか疑問文」の問いかけとすることができることを配付資料で示した(図2)。学習者にとって疑問節を含む複文や聞き手への問いかけの使用は難しいが、質問文を書き換えることでスムーズに導入できると考えた。

学習者はデショウカという形式は初級で学んでおり、形式自体を作ることには難しくないとされる。しかし、実際にどの場面で使用するのかに関しての指導が必要である。

<p>タイプ2. 質問を「課題の提示」あるいは、「聞き手への問いかけ」に使う 質問「このことばはなぜ人を引き付けるのか」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題の提示:「このことばがなぜ人を引き付けるのかについて、3つの側面から発表したいと思います。」</li> </ul> <p>例2) 私が今日発表するのは、「この国の思いやりは、世界遺産。」です。 <u>このことばがなぜ人を引き付けるのかについて</u>、3つの側面から発表したいと思います。<u>1つめは～</u>、<u>2つめは～</u>、<u>3つめは～</u>。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 聞き手への問いかけ:「このことばがなぜ人を引き付けるのでしょうか。それについて、3つの側面から発表したいと思います。」</li> </ul> <p>例3) 私が今日発表するのは、「この国の思いやりは、世界遺産。」です。 <u>このことばはなぜ人を引き付けるのでしょうか</u>。これについて、3つの側面から発表したいと思います。<u>1つめは～</u>、<u>2つめは～</u>、<u>3つめは～</u>。</p>
--

図2 質問の書き換えに関する授業配布物(部分)

第10回ではグループ内で発表し、各自発表を録音させた。その後、各グループから選ばれた1名にクラスの前で発表させた。授業後、学習者自身で録音を聞いて、書き起こし、発表の表現などを訂正することを課した。学期末にはレジユメに基づいたレポート作成と発表の振り返りを課した。



## 12. 学習者の発表に見られた「でしょうか疑問文」

以下では、学習者自身の書き起こしから、「でしょうか疑問文」の使用を見ていく。

学習者Aはポスターを示して簡単に紹介したあと、本題である広告のおもしろさを説明する前に「でしょうか疑問文」で聞き手に問いかけている（下線）。

(30) <sup>7</sup>皆さん、こんにちは。今日は宇治茶の広告ポスターについて発表したいと思います。

このポスターは、宇治茶の宣伝広告で、(中略)。

さて、一見見れば、極普通の広告ですが、いったいどこがおもしろいのでしょうか。

良く考えたら、二つの側面から説明できると思いました。一つ目は言語的には(後略)

この「でしょうか疑問文」は、前出の例25の「この広告語のどこが面白いと思いますか。」を書き換えた文とも考えられる。

次に、学習者Bは、資源を大切にしようという明確なメッセージを持った発表で、前段の問題点を受けて、反語的に意見を訴えかけ、聞き手の印象に強く残る効果をもたらしている。

(31) (前略)人々は、通常何が安いか何をいっぱい買うと思込みがあるではないか。

けれども、本当にそんなに必要があるでしょうか。この広告で説明したことだけではなく、私たちの日常生活の中にはいろんなことができるでしょう。この世界の資源は有限ですので、私たちは無駄遣いをやめましょう。

学習者Cは、発表の冒頭に、聞き手がレジュメを持っているか確認する際に「でしょうか疑問文」を使用した。「問いかけ(聞き手・その他)」に分類される用法である。

7 学習者の発表は、学習者自身による書き起こしに基づき、著者が音声を確認して転記した。学習者の発話には文法の誤り等も含まれるが、そのまま示す。

(32) はい、皆さん。こんいちほ。プリントはもうお持ちでしょうか。はい、それでは発表いたします。(後略)

以上を含む学習者のデショウカの使用を表5に示す。

表5 28名の学習者の「でしょうか疑問文」の使用数

デショウカの用法	使用数
問いかけ(聞き手・本題)	8
問いかけ(聞き手・その他)	1

28件の発表のうち9件の発表に「でしょうか疑問文」の使用が見られ、特に「問いかけ(聞き手・本題)」が8例であった。前述の通り学習者は「でしょうか疑問文」を使用できないことが多く、今回の発表で使用が見られたことは、一定程度の効果があつたのではないかと考えられる。

一方で、質問を利用したが、問いかけの「でしょうか疑問文」の使用が見られなかった学習者もいる(例33 学習者F)。

(33) F: 広告は何を伝えたいですか。広告語に注目してください、予想を超える楽しさという簡単な言葉のなか、深い意味が込んでいる。(後略)

学習者Fは質問とそれに対する解答を示したことで、課題提示—課題解決の構成となり、聞き手にはわかりやすい発表であった。しかしながら、表現形式の正確さや内容の豊かさには欠ける点があり、「でしょうか疑問文」の習得は今後の課題である。

以上、口頭発表に質問づくりを取り入れた指導の効果として2点指摘できる。

1. 学習者に聞き手への問いかけが効果的であることを示し、使用が促進できた。
2. 質問の書き換えによって「でしょうか疑問文」を用いた問いかけを取り入れた発表が見られた。

ただし、残る問題として、すべての学習者に問いかけ、特に質問づくりを書き換えた問いかけが見られたわけではないことが挙げられる。問いかけの表現が全く見られない学習者や、質問を盛り込んでも疑問文そのま

まで使用した学習者(例Fなど)が見られた。形式面の習得が遅い学習者への指導は今後の課題である。

さらに、今回の授業実践では、指導開始前に問いかけ表現の使用に関する自己評価や、実際に表現が使用できるかなどに関する事前調査は行っていない。したがって、発表で使用されたことがすべて本実践の効果であると検証されたわけではない。

以上、質問づくりを口頭発表の活動に取り入れ、発表の表現としても利用できることを指導した実践の結果、発表の内容と表現に質問の利用が見られ、一方通行ではない聞き手とのコミュニケーションを促すことに寄与している可能性が示唆された。

また、今後の課題として、指導効果を検証するために引き続き実践を積み重ねていくことが必要であることを確認した。

### 13. まとめと今後の課題

本稿では、学術場面での口頭発表においてもコミュニケーションが重要であることから、聞き手への問いかけの機能を持つ「でしょうか疑問文」に焦点を当て、日本語教育におけるこれまでの指導、CSJの独話の使用調査を踏まえ、留学生対象授業における口頭発表の指導に質問づくりから問いかけを導入した実践の効果について述べた。

日本語教育においては、ダロウの丁寧体として推量・概言のほか、対人配慮の許可・依頼の表現、疑念の表現、「(の)ではないでしょうか」による主張の機能が主に取り上げられてきた。一方「でしょうか疑問文」を効果的な問いかけ表現として明示的に指導することはなかったことを確認した。

次に、CSJの使用実態の調査から、本研究が焦点とする聞き手に問いかける用法の使用頻度は、「その他の講演」>「模擬講演」>「学会講演」の順に高く、その違いは話し手と聞き手の人間関係の違いと距離のとり方によると考えられた。その上で日本語教育への示唆として、①問いかけは「でしょうか疑問文」の形式であること、②独話であっても問いかけを取り入れることはコミュニケーションの図る上で有効であること、③使用においては、場面や発話の改まり度に応じて聞き手との適切な距離を取ることが重要である、の3点を得た。

筆者が行った留学生対象授業の口頭発表の指導に質問づくりを取り入れる実践授業では、作成された質問文を「課題の提示」と「聞き手への問

いかけ」に書き換え、「でしょうか疑問文」を使用したことがない学習者に体験を促した。その結果、発表には質問文を取り入れた問いかけのほか、その他の問いかけの用法も見られ、指導の効果が示唆された。しかし同時に、今回の実践では事前調査などを行っておらず、今後は効果の検証に向けて実践の継続が必要であることも述べた。

現代社会において、学術場面だけでなく、企業活動や社会活動においても口頭表現の重要性はますます高まっている。NHKにおいてTED<sup>8</sup>のプレゼンテーションが放映されるなど、聴衆に訴えかける話し方の指導の必要性はますます高まるであろう。日本語教育の現場においても聞き手に訴えかけることの重要性とともに、「でしょうか疑問文」の効果を明示的に指導していくことが必要であると考えられる。

## 参考文献

アンホルト 2008

ロバート・R・H・アンホルト著、鈴木炎他訳(2008)『理系のための口頭発表技術』講談社ブルーバックス

犬飼 2007

犬飼康弘(2007)『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』スリーエーネットワーク

瓜生 2003

瓜生佳代(2003)「デショウカ文の用法について」『ポリグロシア』7, 75-85.立命館アジア太平洋大学言語教育センター

グループジャマシイ 1998

グループジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

小磯花絵・西川賢哉・間淵洋子

小磯花絵・西川賢哉・間淵洋子(2006)「第2章転記テキスト」『報告書『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告No.124,23-132. <<https://ccd.ninjal.ac.jp/csj/document.html>>

国際交流基金-日本国際教育支援協会 2002

国際交流基金・日本国際教育支援協会(2002)『日本語能力試験出題基準[改訂版]』凡人社

清水 2013

清水崇文編著(2013)『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』スリーエーネットワーク

スリーエー・ネットワーク 2012

スリーエー・ネットワーク(2012)『みんなの日本語初級II 第2版』スリーエー・ネットワーク

8 正式名称Technology Entertainment Design。学術・エンターテインメントなど幅広い分野の専門家による講演会を主催している米国の非営利団体。(『知恵蔵mini』より抜粋)

- 東海大学留学生教育センター 1995  
東海大学留学生教育センター 口頭発表教材研究会(1995)『日本語 口頭発表と討論の技術』東海大学出版会  
東京外国語大学留学生日本語教育センター 2014  
東京外国語大学留学生日本語教育センター(2014)『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解[中上級]』スリーエーネットワーク  
二通-大島-佐藤-因-山本 2009  
二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2009)『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会  
野田 1997  
野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版  
堀 - 大隅-世良 2018  
堀恵子・大隅紀子・世良時子(2018)「質問作りの手法を取り入れた読解授業」『日本語教育方法研究会誌』24(2),58-59.  
堀 2018  
堀恵子(2018)「質問づくりを取り入れた読解活動—グループ活動に対する学習者の捉え方を焦点に—」『日本語教育連絡会議論文集』第31回(2018)論文集,118-127.  
<<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun/2018020.pdf>>  
前川 2015  
前川喜久雄(2015)『報告書『日本語話し言葉コーパスの構築法 第1章 概説』国立国語研究所報告No.124,1-22. <[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cs/j/k-report-f/01.pdf](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cs/j/k-report-f/01.pdf)>  
南1985  
南不二男(1985)「質問文の構造」水谷静夫編『朝倉日本語講座 4 文法と意味 II』39-74. 朝倉書店  
メイナード 2005  
泉子・K・メイナード(2005)『談話表現ハンドブック』くろしお出版  
ロススタイン - サンタナ 2015  
ダン・ロススタイン・ルース・サンタナ著, 吉田新一郎訳(2015)『たった一つを変えるだけ』新評論  
ANHOLT 2006  
Robert R.H. Anholt, Dazzle'em style The art of oral Scientific presentation 2nd ed., Burlington, 2006.  
インターネット  
「TED」「知恵蔵mini」「コトバンク」  
・ <https://kotobank.jp/word/TED-191078#E7.9F.A5.E6.81.B5.E8.94.B5mini>(閲覧日2019年3月10日)  
コーパス  
国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)  
国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』Corpus of Spontaneous Japanese(CSJ)

## SUMMARY

### **The Actual Usage of the “*Desyouka* questions” in Oral Presentations in the Academic Setting: Corpus Survey and Classroom Practice**

In oral presentations in the academic setting, presenting a research problem using a rhetorical *desyouka* question has been proven effective. However, previous teaching manuals lack an explicit discussion and instruction on this form of questioning. After providing an overview on how *desyouka* questions have been dealt with in teaching Japanese as a foreign language this study elucidates its actual use through the *Corpus of Spontaneous Japanese*. In addition, the question formulation technique was introduced in a class for advanced learners of Japanese, after which they were guided to rewrite questions using *desyouka* and were instructed to present their research. The result indicates that a number learners was able to ask questions using rhetorical *desyouka* questions in their oral presentations. Therefore, this study suggests that providing explicit instructions on asking questions using *desyouka* for presenting a research problem may contribute to the improvement of oral presentation skills of Japanese language learners.

**Key words:** *Desyouka* questions, questioning, the *Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ)*, Academic Oral Presentations, Communication, Question Formulation Technique (QFT)

## SAŽETAK

### **Korištenje pitanja s *desyouka* za izlaganje problema u akademskim usmenim izlaganjima: na temelju ispitivanja korpusa i prakse u nastavi japanskoga jezika**

U usmenim akademskim prezentacijama na japanskome jeziku učinkovito je koristiti retoričko pitanje s *desyouka* za izlaganje istraživačkog problema, no ta upotreba nije jasno objašnjena u nastavi japanskoga kao stranog jezika. Ovaj rad najprije daje pregled o tome kako se u nastavi poučavaju pitanja s *desyouka*, a zatim ispituje kako se pitanja s *desyouka* zapravo koriste na temelju podataka iz Korpusa spontanoga japanskoga jezika. Osim toga, u nastavi japanskoga za naprednu razinu učenja uvedeno je poučavanje postavljanja pitanja, nakon čega su učenici vježbali sastavljati pitanja s *desyouka*, a zatim su usmeno prezentirali svoje istraživanje. Rezultati analize pokazuju da je određeni broj učenika u usmenoj prezentaciji koristio retoričko pitanje s *desyouka*. Stoga se iz ovoga istraživanja može zaključiti da eksplicitno objašnjenje o tome kako postavljati pitanja s *desyouka* može pridonijeti poboljšanju vještine usmene prezentacije kod učenika japanskog kao stranog jezika.

**Ključne riječi:** pitanje s *desyouka*, postavljanje pitanja, Korpus spontanoga japanskog jezika (CSJ), akademska usmena prezentacija, komunikacija, tehnika formuliranja pitanja (QFT)